

Lee Kuan Yew,

*The Singapore Story: Memoirs of Lee Kuan Yew.*

Singapore: Singapore Press Holdings, 1998,  
680 pp.

いわ さき いく お  
岩 崎 育 夫

はじめに

1959年に36歳の若さで首相に就任し、90年11月、後継者にポストを譲るまで31年間シンガポール国家に君臨したリー・クアンユーは、シンガポール政治や国家と不可分の関係にあることは周知のとおりである。リーは人口300万強（1998年現在）の移民社会・都市国家を舞台に、イギリス植民地からの独立、ゼロからの国家形成、世界にも稀な堅固な一党支配体制の確立、超管理社会の構築、経済的貧困から先進国並の繁栄へ、といった数々の難業をわずか数十年で一気に成し遂げた。シンガポールの政治過程は政治家リーの歩んだ道そのもの、国家システムはリーの思想的結晶、といっても決して過言ではなく、リーの政治手法や統治スタイルを賞賛する人も批判する人も、しばしば「リー・クアンユー」と「シンガポール国家」を同義語として語る。リーは首相退任後、上級相に就任したが、日常的政治運営からは身を引き、よほどのことがない限り第一線復帰は考えられない。その意味で、「リーの時代」は終わった、というよりも自ら幕を引いたのである。

このリーに残された最後の、かつ最も切望された仕事が回顧録執筆である。シンガポールの国家形成とその特徴を考えるうえで、リーが政治活動を始めた1950年からマレーシアから分離独立する65年までの時期は決定的に重要であり、リーが語る政治経済過程の説明は超一級の資料となる。またシンガポール政治に関心がない人でも、現代アジアの傑出した

政治家の一人、リーの歩んだ軌跡はきわめて興味深いに違いない。すでに少なからぬ数のリー・クアンユー演説集や評伝が出版されているが<sup>(注1)</sup>、リー自ら書いたものはひとつもなく、本書が最初の、そしてたぶん最後のリー自身による記録となろう。回顧録は2巻構成の予定で、本書はその第1巻。リーが生まれた1923年からシンガポールが単独独立する65年までの時期を扱う。1999年末までに刊行予定の第2巻は65年から90年の時期を扱い、貧困から繁栄へと大転換を遂げた国造りの話を中心だという。1998年9月16日、75歳の誕生日に発売された本書は国民の間で爆発的人気を呼び、初版3万5000部は数日で売り切れる大ベストセラーになった。以下、本書の内容を簡単に紹介し、その特徴や意義について評者の感想を述べてみる。

I 構成と概略

まず最初に構成を紹介しておく、全43章で各章の表題は以下のとおり。

1. 突然の独立
2. 幼年期の生い立ち
3. 日本の侵略者
4. 解放の後
5. ケンブリッジ大学の日々
6. 弁護士活動、結婚、政治参加
7. 植民地政府との最初の衝突
8. 拡がる「オックスリー通り同志」
9. 華語教育・共産系グループの世界
10. 人民行動党の創設
11. 共産系グループとの最初の対決
12. 危機を増幅するマーシャル初代首相
13. 「ロンドン独立交渉会議」の大失敗
14. マーシャル退陣、リム・ユーホック後継首相の登場
15. 「75%」の独立
16. 共産系グループを狩りだす
17. マラヤ共産党指導者「ブレン」との密会
18. 1959年総選挙——勝利への戦い

19. 政権を担う
20. 待ち受けるさまざまな困難
21. ホンリム補欠選挙での惨敗
22. ラーマン首相の「併合容認」爆弾発言
23. 「イーデンホール茶会事件」——植民地政府と共産系グループの危険な接触
24. 共産系グループの目論みを暴く
25. マレーシア併合への動き
26. ラーマン首相の人となりを知る努力
27. 「マレーシア併合」国民投票
28. ヨーロッパの一国となるイギリス
29. スカルノ大統領の圧力
30. マレーシアへの苦い急ぎ旅
31. 潮流の逆転
32. 独立宣言するシンガポール
33. スカルノ大統領の「対決政策」
34. アフリカ諸国の支持を求めて
35. 敢えてマレー人世界のただ中へ
36. マレー・ショービニズムを煽動するアルバル UMNO 書記長
37. シンガポール州政府とマレーシア中央政府の高まる緊張
38. 憲法修正による危機脱出?
39. オーストラリア、ニュージーランドへの支援要請の旅
40. UMNO の「リー殲滅」キャンペーン
41. 「マレーシア人のマレーシア」を要求
42. シンガポールの離脱を望むラーマン首相
43. 「タラク、タラク、タラク」——汝を離縁す

各章の表題がすでに本書の内容をおおよそ語っているが、膨大な内容を主要テーマに従って便宜的に分類すると3つに分けられる。第1部が、第1章から第5章で、1923年の生年に始まりイギリス留学から帰国する50年までの時期。両親や祖先の経歴、家族構成、幼年期の教育、ラッフルズ学院（中学・高校）での授業生活、日本軍政下の悲惨な経験、戦後のイギリス・ケンブリッジ大学での法律の勉強と青春の日々、ラッフルズ学院時代に出会ったクワ・ギョクチュー夫人とのラブ・ストーリーと続く。ここ

ではリーの個人生活の回想が中心で、ギャンブル好きの父を嫌い、厳格なビジネスマンの祖父を尊敬したこと、華人であるが中国語を話さず子供時代の教育言語が英語、近所の子供たちとはマレー語で遊んだこと、学生時代は反抗的でいたずらな側面を持ち鞭打ち体罰刑を受けたこと、日本軍政時代にとっさの機転で「粛清」を逃れた死と隣り合わせの恐怖や、生きるためにそれこそ何の商売でもしたこと、ケンブリッジ時代に大学にも故郷の家族にも内緒で、シェークスピアの生地として有名なストラットフォード・オン・エイボンで秘密結婚したこと、などが懐かしげに語られる。

第2部が、第6章から第24章で、1950年から62年までの時期。帰国後、弁護士として働き始め、植民地政府職員労働組合、共産系労働組合、さらには華語学校左翼系生徒などの弁護活動を通じた植民地政府との対決、争議案件の勝利、共産系グループ活動家との接触、後に一緒に党を創るイギリス留学仲間との交わり、1954年の共産系グループとの共闘による人民行動党結成、55年総選挙、57年市議会選挙、59年総選挙勝利と政権獲得、共産系グループの分裂と対決、マレーシア併合を巡る心理戦、などが熱く語られる。ここでの中心テーマは、労働組合の若き花形指導者リム・チンション (Lim Chin Siong) 率いる共産系グループとの独立運動の主導権争いを巡る死闘で、リーの語り口は自然と熱がこもる。その中で、植民地政府諜報機関の目をくぐりマラヤ共産党シンガポール地区最高責任者プレン (Plen) と3回にわたって密会したスリリングなエピソードなどがドラマを盛り立てる。

第3部が、第25章から終章で、1962年から65年のマレーシア併合から分離独立までの時期。ラーマン首相の突然のシンガポール併合受入れ声明、併合条件を巡るマレーシア側との神経戦、併合後直ちに噴出した中央政府との軋轢、マレー人政党 UMNO 過激派のリー追放の動き、人民行動党とマレーシア華人協会との非難合戦、反中央勢力を結集した「マレーシア人のマレーシア運動」、シンガポールで2度発生したマレー人と華人の種族流血暴動、そして遂に迎えたマレーシアからの追放、が留まることなく

一気に語られる。ここでは、マレーシア併合と追放を巡る動きが中心テーマで、息詰まる暗闘が数十年経った今でも生々しく回想される。息抜きとしてラーマン首相の人物観察などが挟まれ、リーはラーマンを中世の王様のごとき人物として描き、論理と行動の一貫性を重視するプラグマティスト・リーにとり、全く逆タイプの人生享楽家ラーマンは、調子を合わせるのに苦労したことを言外に匂わせる。

以上の膨大な内容からなる回顧録であるが、共産系グループとの死闘とマレーシア政治家との暗闘の2つがリーが一番語りたかったテーマである。1965年の分離独立を終着点に、その間の主要政治事件が膨大な記録やさまざまな関係者の証言を引用しながら時系列的に詳細に「再現」されている。本書は、1995年に書き始められ完成に3年の歳月を要したが、政治家として多忙なリーは日記を付ける習慣が無かったので、新聞社、大学、古文書館などに勤める若い研究者6人の専門チームが結成され、彼らが集めた植民地政府や独立政府の資料、ドキュメント、回顧録、手紙などをもとに執筆されたという。原稿は元閣僚、トップ官僚、外交官、ジャーナリスト等にコメントを求めるために送られ、事実の正確さなど客観性の確保を期したという<sup>(注2)</sup>。しかし、最大の功労者はリー夫人で、「私には、厳しい批判者と強力な助っ人がいた。妻である。彼女は原稿の一語一語を繰り返しチェックしただけでなく、表現方法を巡り果てしない議論をした。彼女は譲渡証書作成弁護士に一番適任である。私は遺言を書いたのでも、裁判官の仔細な吟味に耐える譲渡証書を書いたわけでもない。しかし、彼女は精確、明瞭、あいまいさのない表現を要求した」<sup>(注3)</sup>、とリーは述懐している。リーは唯一まとまった時間の夜半に、それもしばしば明け方の3時、4時まで執筆したが、その間、夫人は傍らで校正、清書作業を行ったのである<sup>(注4)</sup>。本書は2人の協同作業の成果とあってよいのかもしれない。

## II 特徴・意義・コメント

本書の第1章から第5章は、われわれが普通に考

える自叙伝に近いが、第6章から後は、リーが語るシンガポール政治史といったほうが正確である。とはいえ、自叙伝につきものの、読者を驚かせたり興味をそそる秘話や舞台裏エピソードがいくつか明かされている。クワ・ギョクチュー夫人との秘密結婚はその最たるものであるが、他にも、1959年総選挙勝利後の組閣で、リーは獄中の共産系グループ「仲間」の釈放を絶対条件にしたが、総選挙後すぐ保釈しようとした植民地政府に対し、自分たちが内部体制固めを終えるまで待つよう頼んでいたこと(第19章)、分離がもはや不可避な情況下、敵対的なマレー人政治家が居並ぶマレーシア国会の場で、リーはマレー語でマレー人優遇の種族政治は何も解決しないと熱弁を振るったこと(第40章)、マレーシア分離文書への署名を頑なに拒むマレーシア出身のトー・チンチャイ(Toh Chin Chye)やラジャラトナム(S. Rajaratnam)など人民行動党の一部幹部の説得に手を焼き、ラーマン首相に説得を頼んだこと(第43章)、などの面白い事実が明かされている。しかし、この時期の政治過程で事実が全く不明な出来事、もしそれが明らかになったならばこれまでの理解や通説が書き換えられるに違いないといった類の出来事は、ほとんどないといってよい。本書の意義と価値はシンガポールの政治過程と国家形成の中心にいたリーが、数十年後の現在それをどう感じているか、そもそもリーとはどういった政治家なのかが明らかになった点に求められよう。具体的には次の点にあると考える。

第1は、戦後期シンガポール政治の重要事件に関し、リーの立場や考え方が体系的に示されたことである。本書が扱う1950～65年は重大事件が止まることなく続きシンガポール政治の最激動期であった。この時期の一連の政治的大事件はシンガポール国家の性格を決める上で決定的に重要な意味を持ち、1965年以降はこの時期に定まったルールの上をいかにスムーズに走るかということではない。すでにリーはさまざまな機会に自分の考え、立場、判断を語ってきたが、それらは断片的でしかなく、本書によって初めて系統的・体系的にリーの考えや行動が示されたといつてよく、シンガポール国家や政治史

研究の上で貴重な資料となる。

第2は、回顧録の行間から進る政治家リー・クアンユーの揺るぎない「信念と確信」である。時には、共産系グループの弁護を引き受けた際、植民地当局の弾圧の不当性を非難し、学生運動の非政治性を主張したが、当時の自分は共産系グループの正体も知らずに擁護するなど、「無知で騙されやすい愚か者だった」（本書 p. 173）と、珍しく反省する箇所もあるが、本書を通じて一貫するのは、自分の政治的立場や行動や選択は正しかったという確信であり、本書はそれを再確認するために書かれたとすらいえる。共産系グループやマレーシア政治家との激闘・死闘を、さまざまな角度から少しも倦むことなく延々と熱く語り続ける類い稀な精神力、論理の一貫性、強い説得力は驚異的ですからある。しかも、当時の植民地政府関係者等がリーの行動をどうみていたかの外交文書などを駆使し、第三者の観察や分析を援用して自分の立場や行動の正当性を補完する手法を採っている。これはいかにも弁護士出身政治家らしいが、政治家リー・クアンユーの真髄でもあろう。

第3は、リーが闘った2大政敵の評価が全く対照的なことである。政治家リーには、共産系グループとマレーシア政治家が最大の政治対抗者であったが、この他にも英語教育保守派、人民行動党内ライバルがいた。リーは、英語教育保守派を大衆の気持ちがか全く分からない時代錯誤の政治家と軽蔑し、一時期党内ライバルであったオン・イングアン (Ong Eng Guan) を単なる人気取りの政治家と見下げる。そしてマレーシアの政治家を、マレー人政治家はラーマン首相をはじめ根底に反華人意識を持った種族政治家、華人政治家はシンガポール華人への対抗意識だけを持った偏狭な政治家と断言してはばからない。

これと全く対照的なのが共産系グループである。リム・チンジョンやフォン・スイースアン (Fong Swee Suan) など華語教育出身の若い労働組合指導者がそうであるが、彼らは政治イデオロギー的にはリーと一番距離があり、実際の政治過程でも一番激烈な「やるかやられるか」の死闘を繰り広げた関係にあったが、しかし彼らへの評価には「尊敬」の念すら漂う。リーは共産系グループが夢見た政治体制

・社会理念には全く共感を覚えないが、その理念への個人的献身、意志の貫徹、運動組織能力に、時には密かに、時には明瞭に「賛辞」を贈っている。ここに、リーのあるべき政治家像・大衆運動家像が示されていて興味深い。リーが共産系グループ指導者の中にみた、理念や目的に対する自己確信・献身、行動の一貫性は政治家リーの「原理」でもあったのである。

第4は、政治家リーを「支えた」クワ夫人の大きな存在である。リーの一般的イメージは、鉄のような意志を持った政治家、政敵や無能者に対する厳しい態度にあると考えられているが、本書でもこれが随所に窺える。しかし、息苦しい政治抗争の連続の本書を唯一彩り、オアシスのようにほっと和らげてくれるのが、クワ夫人との「ラブ・ストーリー」である。読者は、リーにもこんな人間的(?)な側面があったのかと驚き、ほほえましく感じるに違いない。リーは本書を「妻でありパートナーであるチュー」に捧げ、夫人は「強い精神力の固まりで、(政治家リーに——引用者) 常に変わらない感情的・知的サポートを与え続けてくれた」（本書 p. 9）と振り返っている。重要な政治的出来事や外遊に必ず夫人が同伴したことは有名だし、それだけでなく、1950年のマラヤ・フォーラム演説文（後述）に始まり、国会議事録に載るリーの国会発言やさまざまな会議のスピーチの文法、綴り、文節の適切さ、重複表現などをチェックする役割を受け持つなど<sup>(注5)</sup>、クワ夫人はシンガポール政治の重要な参加者・証人でもあった。2人の知的信頼関係は、ドイツの有名な社会学者マックス・ウェーバーとマリアンネ夫人とのそれを想起させるが、もし将来クワ夫人がリー評伝を書いたならば、政治家リーや人間リーを知る上で貴重な資料となるだけでなく、きっと面白い読み物になるに違いない。

本書は以上のような特徴と意義を持っているが、ここで評者の疑問とコメントを2つだけ述べておこう。第1は、回顧録でリーがすべてを語っているか、いささか疑問に感じた箇所があることである。むろん、膨大な出来事のうちの何が重要かの判断は人によって違うし、頁数の関係で割愛せざるをえないと



いう技術的制約もあろうが、しかし評者には、これまでシンガポール政治史上、重要とみなされていることへの言及がない、あるいはごく簡単にしか触れていないと思われる箇所が見受けられた。3つの例を挙げよう。

(1) イギリスからの帰国直前にリーは、「植民地独立とマラヤ留学生の任務」と題する有名な演説を行ったが、その叙述がほとんどない。リーが反植民地・シンガポール独立に目覚めるきっかけのひとつは、イギリスでアジア・アフリカ諸国からの留学生と接触したこと、社会主義思想に触れたことにあったとされ、回顧録でも、「ハロルド・ラスキの講義を数回聴いたが、講義は壮大な社会主義理論への道案内の役割を果たし、私はすぐさま魅了された」（本書 p. 105）と述懐している。1949年に一部の留学生が独立を念頭にマラヤ・フォーラム (Malayan Forum) を結成し、50年1月にリーは上記の演説を行ったが、これはリーの反植民地・ナショナリズム「政治宣言」と位置づけられていて、1年ほど前に刊行されたリー評伝は同演説を再録し、「これはケンブリッジ大学留学時代になされたリーの政治活動初期における、おそらく一番重要な政治言説であろう」と解説している<sup>(注6)</sup>。回顧録ならば演説の舞台裏エピソードも含めもっと語ることがあるように思えるが、すでに他の機会です分に語られていると考えたためか、ほとんど言及がない（第5章）。

(2) イギリスから帰国後、リーが最初に所属した政治社会団体が保守派の「海峡華英協会」(Straits Chinese British Association)であったという事実への言及がない。シンガポールの華人社会は、すでに19世紀末から移民集団と海峡集団の2つに分化し、後者は英語教育を受け文化社会的にイギリスに親近感を持っていたことから、「クイーンズ・チャイニーズ」と呼ばれた。彼らは1900年に海峡華英協会を、戦後の48年これを母体に進歩党を結成する。リーはこの社会集団に属し、帰国後に勤めた法律事務所のボス、レイコック (J. Laycock) は進歩党の中心人物の一人で、彼が1951年の立法議会選挙に出馬した際、リーは選挙責任者を引き受けた。これとの関連なのか、また任務も定かでないがリーが海峡華英協会の

書記 (secretary) になったという事実が確認されている<sup>(注7)</sup>。その後、リーの政治的立場は急速に保守派から離れるが（もともと保守派に関心がなく、政治参加の足がかりとして便宜的に利用したというのが正確かもしれない）、政治の出発点が保守派政治団体から始まったというのは興味深い歴史的事実であり、回顧録ならば言及があってもよいと思われるが、なぜかない（第6章）。

(3) 1959年総選挙勝利後の人民行動党内の首相選任を巡るエピソードへの言及がない。普通に考えるならば、党の中心人物リーの就任が当然だと思われるが、党規約がなかったこともあり中央執行委員会で首相選任の討議を行い、書記長リーとポピュリスト的政治家オン・イングアン<sup>(注8)</sup>の2人が争った。人民行動党の総選挙勝利の原動力は、華人大衆の支持を得たことにあったが、彼らは全く英語を理解せず福建語が一番効果的なコミュニケーション言語であった。英語教育のリーは福建語が得意なはずはなく、逆に福建語に堪能で大衆を動かす演説能力に優れたオンの大衆的人気は絶大で、オンはこれを武器にリーに挑戦したのである。首相選考過程を分析した研究書によると、中央執行委員会12名の投票の結果リーとオン（ともに中央執行委員）が同数になり、トー・チンチャイが委員長として特別票を投じ（トーは2回投票した）、ようやくリーに決定したという<sup>(注8)</sup>。シンガポール国家と政治に君臨したリーの政治的立場は一貫して絶対的であったと理解されているが、このエピソードは興味深い事実である。既刊のリー評伝や演説集でこの事実に触れたものはなく、回顧録での説明が期待されたが、しかし本書でのリーのオン評価は、何の定見や政策原理を持たない大衆人気取り政策を連発する「迎合」政治家と手厳しいこともあってか、何の言及もない（第19章）。

第2は、先に本書は、自叙伝というよりもシンガポール政治史に近いといったが、これをシンガポール政治「正史」とみるのは間違ったことである。リーが政治過程の一番中心にいた、実際にシンガポールが歩んだ道も、マレーシアからの追放の一件を除くと、ほぼリーのシナリオどおりに進んだとはいえ、本書は、基本的にはあくまでもリーという個人がみ

た政治史と理解すべきであろう。本書で語られている政治的出来事、経緯、リーの立場、考え方、見方はそのまま事実あるいは真実として受け入れてよいが、政敵の立場や考え方はリーのフィルターを通した説明でしかないことに留意する必要がある。リーは自分が關った共產系グループやマレーシア政治家の意図や立場を推測で語るが、それが当たっているかどうかは別の話である。例えば、マレーシア国家の枠組み維持のためにいかに自分が懸命な努力をしたか繰り返し語るが、もう一方の当時者、ラーマン首相の目には、リーは「マレーシア国家の実現に非常に頑張ったが、それを壊すのにもっと頑張った」と映ったのである（本書 p. 614）。当時の政治状況の再現は、それに関わったさまざまな立場のアクターの話を総合して初めて「真実」に迫ることができるものでしかなく「本書は政府の公式政治史ではない。そうではなく、私が生まれ育ったシンガポール……を巡る物語である」（本書 p. 8）、といみじくもリーが述べるように、この回顧録によってようやくわれわれは「主役」の一貫したナレーションを持ったということなのである。

#### おわりに

現代国家に稀な長期政権を維持したリー・クアンユーは、在任中それこそ世界中の有力政治家と親交や関わりを持った。本書にはブッシュ元大統領、サッチャー元首相、キッシンジャー元国務長官、宮沢元首相など28名にのぼる世界の著名な政治家・外交官が短文を寄せ、いかにリーが傑出した政治家か最大級の賛辞を送っており、リーが世界政治に与えたインパクトの一端を窺わせる。しかしシンガポールにとって一番重要な隣国マレーシアの政治指導者が賞賛者リストから漏れているだけでなく、逆にマハティール首相は、回顧録のマレーシア分離を巡る記述は客観性に欠け、そもそもマレーシアが政治的・経済的に困難な時期に意図的に出版されたと批判し、リーとの間に論争が起こった<sup>(注9)</sup>。本書の執筆はアジア経済危機発生前の1995年に始まったので、マハティール首相の批判の一部は「的外れ」でしかない

が、本書でリーが熱く述懐したマレーシアとの関係が今日でも不安定な状態にあるため、数十年前の出来事の回顧も、「過去形」では済まず「現在形」として捉えられる宿命にあるわけで、シンガポールが置かれた地域政治の複雑さ難しさを物語っている。

しかし、本書は決して過去の出来事を「外に向けて」挑戦的に書いたものではなく、『シンガポール物語——リー・クアンユー回顧録——』のタイトルが示すごとく、「政治家リー・クアンユー」が国民に向けて、自ら全エネルギーを注いで守ってきた「シンガポール国家」にまつわる政治神話の継承を願って書いたものなのである。本書を貫き漲る精神は、自分は絶対に正しい、相手が間違っている、それゆえ、絶対に負けないという揺るぎない確信であり、この精神構造に辟易する人も少なくないかもしれないが、なぜリーがかくも政治闘争において、また人間として精神的に「強い」のか、その理由の一端をこの精神構造が示しているように思われる。第三世界の一小国シンガポールを舞台にしたリー・クアンユーの回顧録は、シンガポール国家の形成史であると同時に、政治家リーの精神構造や人間像を浮かび上がらせたことに最大の意義があろう。

(注1) 1996年までに刊行された主要図書リストは、岩崎育夫『リー・クアンユー——西洋とアジアのはざままで——』岩波書店 1996年 3ページ、を参照。

(注2) *Straits Times*, Sept. 12, 1998.

(注3) *Ibid.*, Oct. 3, 1998.

(注4) *Ibid.*

(注5) *Ibid.*

(注6) Han Fook Kwang, Warren Fernandez, and Sumiko Tan, *Lee Kuan Yew: The Man and His Ideas* (Singapore: Singapore Press Holdings, 1997), pp. 256-262.

(注7) C. M. Turnbull, *A History of Singapore, 1819-1988*, 2nd ed. (Singapore: Oxford University Press, 1989), p. 246.

(注8) Thomas J. Bellows, *The People's Action Party of Singapore: Emergence of a Dominant Party System* (New Haven: Yale University Southeast Asian Studies, 1970), pp. 36, 138.

(注9) *Far Eastern Economic Review*, Sept. 24, 1998, pp. 13-14, 16-17.

(拓殖大学国際開発研究所教授)